

上田秋成の晩年

岡本かの子



文化三年の春、全く孤独になつた七十三の翁、おきな上田秋成は京都南禅寺内の元の庵居あんきよの跡に間に合せの小庵を作つて、老残の身を投げ込んだ。

孤独と云つても、このくらゐ徹底した孤独はなかつた。七年前三十八年連れ添つた妻の瑚璉これんに尼と死に別れてから身内のものは一人も無かつた。友だちや門弟もすこしはあつたが、表では体裁のいいつきあひはするものの、心は許せなかつた。それさへ近来は一人も来なくなつた。いくらからかひ半分にこの皮肉で頑固なおやぢを味あじわひに来る連中でも、ほとんど盲目せつしやうに近くなつたおいぼれをいぢるのは骨も折れ、またあまり殺生せつしやうにも思へるからであらう。秋成自身も命数のあまる処を観念して、すっかり投げた氣持になつてしまつた。

文化五年死の前の年の執筆になる胆大小心録の中にかう書いてゐる。

もう何も出来ぬ故、煎茶を呑んで死をきはめてゐる事ぢや——
小庵を作るときにも人間の住宅に対する最後の理想はあつた。それはわづか八畳の家でよかつた。その八畳のなかの四畳を起き臥しの場所にして、左右二畳づつに生活の道具を置く。机は東側の牖下に持つて行き、そばに炉を切り、まはりの置きもの棚に米醤油など一切飲み食ひの品をまとめて置く。西の端の一畳分の上に梅花の紙帳を釣り下げ、その中に布団から、脱ぎ捨てた着物やらを抛り込んで置く。夏の暑さのために縁の外の葦竹、冬の嵐気を防ぐために壁の外に積む柴薪——人間が最少限の経費で営み得られる便利で実質的な快適生活を老年の秋成はこまごまと考へて居た。しかし、その程度の費用さへ彼は弁じ兼ね

た。やむを得ず建てたところのものは、まつたく話にもならぬほんの間に合せの小屋に過ぎなかつた。彼は投げた気持の中にも怒りを催さないでは居られなかつた。——七十年も生きた末がこれか、と。しかし、すぐにその怒りを宥なだめて掌てのひらの中に転ころばして見る、やぶれかぶれの風流ふうりゆう気が彼の心の一隅から頭を擡もたげた。彼は僅わずかばかりの荷物にもののなかを搔かき廻して、よれた麻あしの垂簾すいれんを探し出した。垂簾すいれんには潤うるおひのある字で『鶉居うずらい』と書いてあつた。彼はその垂簾すいれんの皺しわをのばして、小屋の軒のきにかけた。

彼は十七八年前、五十五歳のときに家族かぞへと長柄川なががらのそばに住んで居たことがあつた。長柄の浜松ががすかに眺められ、隣の神社の森の蔭かげになつてゐて氣に入つた住家すまだつた。彼はその時、家族を背負つたまま十数度も京撰きやうせんの間に転宅して廻つたので、住家の安定といふことには自信が無くなつてゐた。自信を失ひ

ながらなほ安定した気持になりたかつたので、その垂簾を軒にかけたのだつた。『鶉居』と書いたのは鶉うずらは常居なし、といふいならわひ慣ならわしから思ひついた庵号あんごうだつた。

さうした字のある垂簾をかけた小さい自分の家を外へ出て顧みると、世界にたつた一つ住み当てた自分の家といふ気がして、そのとき、もはや老年にいりかけて居た彼は、こどものやうになつて悦よろこんだ。しかし、その悦びも大して長く続かず、六年目には垂簾を巻いて京都へ転居したのをきつかけに、再び住居の転々は始つた。

垂簾はかなりよごれてゐた。秋成は長柄の住家ではじめてそれをかけたと同じやうに外へ出て眺め返してみた。小庵は新しいので垂簾のよごれは目立つた。彼は住居しゆうちやくに対する執著しゆうちやくの亡霊がまだ顔をさらしてゐるやうで軽蔑けいべつしたくなつた。しかし、い

くら運命が転居させたがつても、もうさうはおれの寿命は続かなからう。今度こそはおれは一つの家に住み切つてしまふのだ。さう思ふと痛快な気がして〓〓ざま見い。と彼は垂簾に向つて云つた。そしてその気持を妻の瑚璉尼に話したくなつた。〓〓瑚璉よ。いまだけでいい。ちよつと話し相手に墓場から出て来んかい。

彼はもしこの小屋なら妻はいつも其処そこに起き暮しするだらうと思ふ、小箱程の次の間に向つて壁越しに云つた。あとは笑ひにまぎらした。

紙袋からぽろぽろと焼米を鉢ひちにあけて、秋成はそれに湯を注いだ。そこにあつた安永五年刊の雨月物語うげつを取つて鉢ひちの蓋ふたにし

た。この奇怪に優婉ゆうえんな物語は、彼が明和五年三十五歳のときに書いたものである。書いてから本になるまで八年の月日がかかっている。推敲すいこうに推敲を重ねた上、出版にもさうたう苦勞が籠こもつてゐた。顧みると国文学者の分子の方が勝つてしまつた彼の生涯せいがいの中で、却かえつて生れつき豊ゆたかであつたと思はれる、物語作者の伎倆ぎりようを現したのは僅わずかに過ぎない。その僅かの著作のうちで、この冊子は代表作であるだけに他の著作は散逸させてしまつても、これには愛惜の念が残り、晩年になるほど手もとに引つけて置いた。それかと云つてさほど大事にして仕舞しまつて置くといふこともなかつた。運命に馬鹿ばかにされ、引ずり廻されたやうな一生の中で、自分の好みや天分が何になつたか。なまじそれがあつた為に毛をさか挽もぎにされるやうなくなるしい目にあつたと思へば、感興に殉じた小伎倆こうで立てが、自分ながらいまいまして、

この冊子を見る度にをこな自分を版木に刷り、恥ぢづら搔いて居るやうで、踏まば踏め、蹴らば蹴れ、と手から抛つて置くとこまかせ、そこら畳の上に捨てても置いた。この冊子が世間で評判のよかつたことにも何といふことなしに反感が持てた。要するに愛憎二つながらかかつてゐる冊子であるため、ついそばに置いて居るといふのが本当のところかも知れない。土瓶敷代りにもたびたび使つた。鍋や土瓶の尻しみが表紙や裏に残月形に重つて染みついてゐた。

湯気で裏表紙が丸くしめり脹らんだ蓋の本をわきへはねて、鉢の中にほどよく膨れた焼米を小さい飯茶椀に取分け、白湯をかけて生味噌を菜にしなから、秋成はさつさと夕飯をしまつた。身体は大きくないが、骨組はがっちりしてゐて、顎や頬骨の張つてゐるあばた面の老人が、老いさらばひ、夕闇に一人で飯を

喰べて居る姿はさびしかつた。とぼけたやうな眼と眼が、人並より間を置いて顔についてゐるのが、蛙かえるのやうに見える。

箸はしを箸箱に仕舞しまひながら、彼はおおさうぢやと気がついて、部屋の隅からざるで伏せてあつた小鍋を持つて来て箸を突込み、まづさうに食ひ始めた。鍋にはどぜうが白つぽく煮てあつた。彼はこれを喰べるとき、神経質に窓や裏口を睨にらんだ。五十七歳で左眼をつぶして仕舞ひ、六十五歳でその左の眼がいくらか治つたかと思ふと、今度は右の眼が見えなくなつた。それから死を待つ今日まで眼の苦勞は絶えなかつた。

どぜうがよろしいと勧める人があるので食ひ続けて居るのを、一度わからずやの僧侶に見つかつて、人間は板齒いばで野菜穀こくもつを食ふやうに出来てゐる。どぜうなど食ふは殺生せつしようのみか理はずに外れてゐる。とたしなめられ、その場は養生喰ひだと、抗弁はし

たものの、その後は、食ふたびに気がさした。死ぬのに眼などはもうどうでもよろしいではないかと思ひつつも養生はやめられなかつた。

小さいとき驚癩でしばしばなやまされながらも、神経の強い彼はときどき妄想性にかかつた。狐狸こりの仕業はかならずあるものと信じて居た。内心忸怩じくじとしながらかうやつてどぜうの骨をしやぶつてゐるときには、あの忠告した坊主がほんたうは自分も食ひ度たいのだがそれが食へぬので、あんな嫌がらせをいつたので、それを押して食つて居る自分を嗅かぎつけたら、うらやましくなつて、何か化性にでもなつて現れて来るやうな気がした。事実その姿は変に薄つぺらな影絵となつて障子しょうじの紙から抜けたり吸ひ込まれたりするのを彼は感じた。すると彼はいつそ大胆になつて、わざと大ぴらにどぜうを食つて見せるのだつた。そ

れで影絵が消えて仕舞ふと、彼は勝利を感じて箸をしまつた。南禅寺の本堂で、卸戸おろしどをおろす音がとどろいた。その間に帚ほうきで掃くやうな木枯こがらしの音が北や西に聞えた。彼は行燈あんどんをつけてから、煎茶せんちゃの道具を取り出した。

彼は後世、煎茶道の中興の祖と仰がれるだけにこの齢になつても、この道には執著を持つた。むしろ他の道楽を一つ一つ切り捨てて行つて、たつた一つを捨て切れず、残した好みであるだけに全身的なものがあつた。「茶は高貴の人に応接するが如し、烹点ほうてん共に法を濫みだれば其悔そのかへるべからず」これが、彼の茶に対するときの心構へであつた。それで、茶具の数も、定めぬ数の二十具を減して十六にし、また、十二具にし、やぶれた都籠から取出したのはぎりぎり間に合せの茶瓶、茶盞、茶罌ちやつぼぐらゐの数に過ぎなかつた。けれど、煎茶の態度は正しかつた。生活

は老貧のくづすままに任せたけれど、そのなかにただ一筋、格をくづさぬものを、踏みとどめ残して置きたいといふのが、老人の最後の自尊心だつた。

彼は、湯ゆがま罐かんに新しく水をいれて来て火鉢に炭をつぎ添へてかけた。彼は水にやかましかつた。近所の井戸のものには腥せい氣きがあるとか、鹹かん氣きがあるとかいつて用ひなかつた。わざわざ遠く的一条の上の井戸から人を雇つて甕かめに汲くみいれさせた。

京撰の間では、宇治の橋本の川水が絶品だと云つて、身体のためなうちは、水筒を肩にかけ一日仕事でよく汲くみに行つた。それらの水を貯へた甕は夕方から庭に持ち出して蓋ふたをとり、紗帛で甕の口を覆ひ、夜天に晒さらした。かうすると、水は星露の氣を承うけて、液体中の英靈を散らさないと、彼は信じて居た。何でも事物の精髓あじわを味ふことには、彼はどんらんな嗜しよく慾よくを持つて

居た。

彼はゆつたりと坐つて作法のやうに受汚で茶盞を拭ひ、茶瓶の蓋を開けて中を吟味し、分茶盒と茶罌を膝元に引付けた。そして湯の沸くのを待った。彼は幼時、いのちにかかはるほどの疱瘡をして、右の手の中指は小指ほどに短かつた。左の手の人差指も短かつた。さういふ不具の手を慣して器物を扱つてゐるので、一応は何気なく見えるが、よく見ると手首は器物に獅噛みついてゐた。まるで餓鬼の執著ぢや。彼はわざといやなものを自分に見せつけるいこちな習癖がここに起るときに、その手首を眼の前でひねくつて、ひとりくつくつと笑つた。さういふ手で筆を執るのだから、どうせろくな字を書けつこないと自分を貶し切り、人がどんなに出来栄えを褒めても決して受け容れなかつた。

火鉢にかけた湯罐の湯水が、やうやく暖まつて来て、微々の音を立てるやうになつた。秋成は、膝に手を置いて、そより、とも動かなかつた。ただ湯の沸くのを待つだけが望みであるこの森巖で気易きやすい時間に身を任せた。木枯こがらしが小屋を横に掠かすめ、また真上から吹き圧おさへる重圧を、老人の乾いて汚斑しみの多い皮膚に感じてゐた。

永い年月工夫くふうしたかういふ境地に応こたへべき気の持ちやうが自然と脱却して、いまは努めなくても彼の形に備そなつてゐた。それは「静にして寂しからず」といふこつであつた。

湯が沸いて「四辺泉の湧わくが如く」「珠たまを連ぬるが如く」になつた。もうすこしすると「騰波鼓浪とうはころうの節に入り、ここに至つて水の性消え即すなわち茶を煮べき」湯候ゆじろなのである。秋成には期待の氣持が起つて熱いものが身体を伝つたつて胸につき上げて来るのを

覚えた。それが茶に対する風雅な熱意ばかりであるのかと思ふと、さうではなく、それに芽生めえたいろいゝ俗情が頭を擡もたげて来るのであつた。

青年時代の俳諧はいかいざんまい三昧、それをもしこの年まで続けて居たとすれば、今日の淡々如きにかうまで威張いばらして置くものではない。淡々奴根めが材木屋のむすこだけあつて、商才を弟子集めの上に働はたらかして、門下三千と称してゐる。これがまづ、いまましい。

四十の手習ひで始めた国学もわれながら学問の性はいいのだが、とにかく鬪争くやに気を取られ、まとまつた研究をして置かなかつたのが次に口惜くやしい。俺を、学問に私すると云つた江戸の村田春海はるみ、古学を鼻にかける伊勢の本居宣長もとおりのなが、いづれも敵として好敵ではなかつた。筆論をしても負けさうになればいつでも向ふを向いて仕舞しまふぬらくらした気色の悪い敵であつた。これに向

ふにはつい嘲笑ちやうしやうや皮肉が先きに立つので世間からは、あらぬ心事を疑はれもした。人間性の自然から、独創力から、純粹のかんから、物事の筋目を見つけて行かうとする自分のやり方がいかに旧套きゆうたうに捉とらはれ、銜学げんがくにまなこが眩くらんでゐる世間に容れられないかを、ことごとく悟つた。

和歌については、小沢蘆庵おざわろあんのことが胸に浮んだ。一方では、堂上風の口たるい小細工歌こさいくわが流行はり、一方では古学派のわざとらしい万葉調の真似手の多いなかに、敢然かんぜん立つて常情平述主義を唱へ「ただ言歌ことうた」の旗印を高く掲げた才一方の年上の老友がうらやまれた。自分に、若もし、もう少し和歌の志こころざしが篤あつく、愚直の性分があつたら、あの流儀は自分がやりさうなことであつた。その「ただ言歌」の心要として蘆庵の詠よんだ、

言の葉は人の心の声なれば

思ひを述ぶるほかなかりけり。

といふ歌などは「雨降るわ、傘持てけ」のたぐひで歌とも何とも云ひやうのないものだが、なぜかそれが、歌を詠まうとするときには、必ず先きに念頭に浮んで詠みはづまうとする言葉の出頭でがしらを抑へ、秋成をいまいましがらせた。

野暮な常識臭いものを固く執とつて動かない蘆庵の頑迷不遜ぶそんが彼の感興を醒さめた。そしてまた歌はいくらやつても蘆庵が先きに掻かき廻して居るといふ感じが強かつた。蘆庵といふ男は始め天下一の剣士になるつもりで、それが適かなひさうもなくなつたので、歌に変つたのだといふほどあつて、とても一徹なところが、あり、四十年近くも地虫のやうに岡崎に棲すみつき、二本の庭の松を相手に、歌のことばかり考へて居た。自分がはじめて彼を訪ねたときには、もてなしだと云つて、武骨な腕で、琴をひい

て聴かせたものだ。そのまじめくさつた歌にはをかしくて堪へられなかつたが、無理に我慢して歌詠み仲間の礼儀に歌の遣り取りをしたものだつた。だが深切気のあるおやぢで、自分ののらくらして居るのを見兼ねて、せめて弟子取りでもしろと、勸めて呉れた。自分はおもふさまなことを云つてそれをはねつけ、あの律儀なおやぢに、溜息を吐かせた。

大雅、たいが 応拳、おうきよ 月溪げつけいなどといふ画人が、急に世にときめき出したのも、癩しやくに触つた。彼等の貧乏時代は、茶屋の掛行燈かけあんどんなど引

受け、がむしやらに雑用稼ぞうようぎをして、見られたさまではなかつたのを、この頃はすつかり高くとまり、方外の画料を貪むさる。中

にも月溪とは、智恩院の前の住ひでは、すぐ近所合ひであり、東洞院では同じ長屋住ひで味噌醬油みそしょうゆの借り貸し、妻の瑚璉尼が

飲める口であつたので、彼はよい飲み友達にして湯豆腐づくめ

の酒盛りなど、度々したものだつた。その頃からこの画描きは、食ひ道楽、飲み道楽、その上にもう一つの道楽もあつたのを、出世したから堪たまらない。すつかり身体をこはし、せん頃久しぶりに見舞つたら、樽詰たるづめの不如法のさらし者を見るやうに衰弱して居た。しかも、それで居ながら酒の肴さかなは豆腐か、つくしにかぎるなどと、まだ食気のことを云つて居た。岸駒が俗慾おごの奢りを極め、贅ぜいたく沢な普請をして同功館などと大そうもない名をつけたのも癩かに触つた。絵は、書典と功が同じである、それで画屋は同功館であるといふいはれださうだ。変なつけ上り方をすればするものだ。

かういふ不平を続けて込み上らせて来ると秋成は、骨格の太さに似合はず少量な血が程よく身体を循環して、ぽつと心に春めくものを覚えるのだつた。眼瞼がんけんがびくびく痙攣けいれんするのも一つ

の張合ひになつて来た。湯罐の湯はすつかり沸き切つて、むやみにぐらぐらひつくりかへつてゐるが彼はかまはなかつた。それよりもこの場合、肉体的に何か鋭い刺戟しげきを受けて興奮した、いまの気持を照応せしめたかつた。そこで湯罐の熱い膚はだに指の先きを突きつけた。痛熱い触覚が、やや痺しびれてゐる左の手の指先きに噛かみつくると、いはうやう無い快感が興奮した神経と咄嗟とつさに結びつき、身体中がせいせいと明るくされるやうである。彼はこの分ならまだ五六年は生き堪へられるぞと、心中で呼ぶのだつた。彼は左の手の中で一本湯罐の胴ほうそうに触らないで痺れたままの感覚で取残されてゐる例の疱瘡ほうそうで短くなつてゐた人差指をも、公平にこの快味に浴させようと、他の四本の指を握り除け、片輪な指だけ、湯罐の胴にぢりりと押つけた。甘美な疼痛とうつうがこの指をも見舞つた。いつそこの指を火にくべて、われとわが生

命の焼ける臭ひを嗅いだらどれほどこころゆくことだらう。

氣持が豪爽ごうそうになつて来るとまだまだ永く生きられさうな氣がし出した。むしろ、これからだといふ氣さへし出した。|| 人間はいつまでたつても十七八の氣持は残つてゐる、と若いたい、こ、持ち茶人の宗了といふ男が、自分に體驗もないくせに、誰に聴いたものか、かう云つたのを覚えて居る。その若いたい、こ、持ち茶人の宗了だが、彼が茶番をして、千鳥の役を引受けて酒席へ出たことがあつた。美男のうへ、念入りの化粧をしたので、芸子女中まで見惚みとれるくらゐだつた。ところがその顔の額ひたいへもつていつて彼は「千鳥」と太文字で書き入れた。それから右の頬ほおづらへ師匠の宗佐の名を鑑定の印の形に似せて朱で書き入れた。この趣向は飛抜けて奇抜だつたので、たちまち京阪けいはんの遊び仲間の評判になつた。当時その酒席に居た秋成は、宗了のこの

働きを眼の前に見て、これがほんたうの若さから来る即興といふものではないかと感じたことであつた。どう思ひ切つても秋成自身には、この芸は出来さうもなかつた。宗了の美男と、若さ、がうらやまれた。

さて、秋成自身ふり返つて見るのに、自分の肉体には若いうちから老いが蝕むしばんでゐて、思ひ切つた若さも燃えさからなかつた。だが、わが身のうちに蝕むしばんだこの若い頃からの老いが、その代り自分のなかにある不思議な情緒を、この七十の齡まで包みかばひ保たしてゐるのかも知れない。うつし世のうつしごとの上では満足出来ず、さればとて死を越えては、いよいよ便りを得さうも無い欲情——わづかにそれを紙筆の上に夢にのみ描いて、そのあとを形にとどめて来た。それは現実の自分の上では、身体でつきとめようとすれば、ここに遁のがれ、こころで押

へようとすれば身体に籠る。雨晴れて月朦朧の夜にちび筆の軸を伝つてのみ、そのじくじくした欲情のしたたりを紙にとどめ得た。『雨月』『春雨』の二草紙はいはばその欲情の血膿を拭つたあとの故紙だ。しかし肉漿や膿血は拭ひ得てもその欲情の難みのしんは残つてゐる。この老いにしてなほ触るれば物を貪り恋ふるころのたちまち鎌首をもたげて来るのに驚かれた。そして、貪り恋ふる目標物の縹渺として捕捉し難いにも自分乍ら驚かれた。

それは正体が無くて、不思議なしわざだけする妖怪によく似てゐた。霽れかかつた朝霧の中に冴えだけ見せてゐる色の無い虹のやうにも覗かれた。

老いを忘れる為に思ひ出に耽るとは卑怯な振舞ひとして、秋成はかねがね自分を警めてゐた。過ぐ世をも顧りみない、行く

末も氣にかけない。ただ有り合ふ世だけに当嵌めて、その場その場に身を生すことを考へて来た——事実、恋ふべき過去でも無い、信じられる未来とも思へなかつた、業風の吹くままに遊び散らし、書き散らし、生き散らして来たと思へる生涯が、なぜか今宵は警めなしに顧りみられる。そして、そろそろ、まんさんたる自分の生涯の中に一筋貫くものがあるのに気がつき出した。これを、今すこし仔細に追及し、検討して見るとしても、あながち卑怯未練と自己嫌悪に陥るにもあたるまい——否、何かしらず、却て特別に自分に与へられた道の究明といふやうなけ高い、氣持さへ感じられもして来るのだつた。

秋成は湯罐の蓋をとつて見た。煮くたらかさされて疲れ果て、液体のまん中を脊のやうに盛り上げて呻吟してゐる湯を覗いて眉を皺めた。物思ひに耽つて居るうちに茶の湯が煮え過ぎて仕舞

つてゐた。秋成は、立ち上つて覚束ない眼で斜めに足の踏み先
きを見定めながら簷下のきしたへ湯罐の水を替へに行つた。疝腫で重い
腰が、彼にびつこを引かせた。

燠おきのたつた火を、その儘ままにして彼は、湯罐を再びその上へか
けた。彼はもう茶を入れて飲む方の興味は失つて居たが、水が
湯になるあの過程の微妙な音のひびきは続けて置きたかつた。
突き詰めて行くところを程よく牽制けんせいしてなめらかに流して呉くれ
る伴奏であるやうに思へた。彼は耳を傾けたが、風はもう吹き
やんで、外はぴりぴりする寒さが、寺の堂も山門も林をも、腰
から下だけ痺しびらせつつあるのを感じた。——京は薄情な寒さぢや。
と彼はここでひと言、ひとりごとをいつた。彼は元通りきちん
と坐すわつて、考への緒口いとぐちに前の考への糸尻いとじりを結びつけた。——愛
しても得られず、憎んでも得られず、勝負によつて得られず、た

だ物事を突きつめて行く執念のねばりにだけ、その欲情は充たされたのだつた。だが、この世の中にそれほど打ち込んで行けるほどのものがあるだらうか。いくら執念のねばりを愛する欲情であるといつて、むやみに物を追ひ、獅^し噛^がみついて行くわけには行かなかつた。魅力といふものが必要だつた。そして魅力の強いものほど飽きが来た。飽きが来なければ、むかうが変つた。

生母には四つの歳に死に訣^{わか}れた。曾根崎の茶屋の娘だつた。場所柄美しくない女ではなかつたらうけれども、誰も父の名を明かして呉^くれないところから考へると、いづれは公^{おおやけ}にし難い関係から生れた自分だらう。物ごころついてそこに父と呼び母と呼ぶところの人があるのに気がつく時分にはもう堂島の上田の家^きに引取られて居た。上田氏が自分の何に当るか訊^きく気はなか

つた。訊けば嘘をつかれるだらうと判つてゐた。同じ嘘なら現在むやみに可愛がつて呉れる上田夫妻を、父と呼び、母と呼ぶ嘘の方が、堪へられた。彼の数奇すうきな運命は幼年の彼に、こんなませた考へをもたせた。

二度目の母である上田の妻も自分を愛したが二三年を数へただけで死んだ。母といふものはたいがい早く死ぬものと、こども心にきめて何とも思はなかつた。ところが、上田氏の迎へた後妻で、自分に三度目の母になる女は、長生きした。彼女は秋成が六十近い年齢になるまで生きて妻と一しよに自分ひきせおが引脊負つて歩いた女である。その女も母として自分を可愛がつた。それで秋成の若いうち、世間はあなたはふしあはせのやうでも仕合せな方、二人もおふくろさんを代へて、しかもどのまま母もまま母のやうでない方、と言つた。だが、今考へるのにそれも

よしあしだ。まま母が、まま母らしくむごたらしくして呉れたら、一筋に生みの母への追慕は透つて生涯の一念は散らされずに形を整へてゐて呉れたかも知れない。それをなまじひ、わきからさし湯のやうに二人までの愛を割り込ませ、けつきよく自分の生母へのあこがれを生ぬるいものにして仕舞つた。をかしなことは自分が母親をなつかしむとき、屹度、三人の女の面影が胸に浮び、若い生母の想像の傍おもかけから老いた最後の養母まで、ずらりと面影を並べて、自分の思ひ出を独占しようとして競ひ合ふ。自分は遠慮して、そのどれへも追慕のこころを専らもっぱにするのを控へるのだつた。

かくべつすぐれたところの無い養母たちにも心から頭を下げたことが二度あつた。一度は、後のまま母の生きて居るうち、自分の五十五の年であつた。中年で習つて、折角はやりかけた

医術も、過勞のため押し切れなく成り、それで儲けて建てた、かなり立派な家も人手に渡し、田舎へ引込んだ年であつた。そのときは妻の母も一緒にして仕舞つたので、狭い田舎の家に二人の老婆がむさくるしく、ごたごた住まねばならなかつた。もとは大阪堂島の、相当戸前も張つて居る商家のお家はんであつたのを、秋成がその店を引受けてから急に左り前になつたその衰運をまともにつきあひ、わびしいめに堪へながら、秋成がやつとありついた医業にいくらか榮えが来て、樂隠居にして貰つたところで、また、がたんと貧乏住居に墮ちたのだつた。だから秋成にしてみれば、まま母に、何とも氣の毒でしやうが無かつた。そこで、五十五の男が母の前に額をつけ、不孝、この上なしと、詫びたのだつた。すると、まま母は「何としやうもない事だ。」と返事して呉れた。ものを諦める、といふほど積極的

に氣を働かす女でなく、いつもその儘まま、その儘のところところに自分を当て嵌はめた生活を、ひとりでするたちの女だつた。けれども、この母のこの返事は、可か成なり秋成に世の中を住みよくさして呉くれた。この母と妻の母と、もう五十に手のとゞきさうな妻と、三人の老婆ろうけいが、老鷄なすなのやうに無意識に連れ立つて、長柄の川べりへ薺なすななど摘みに行つた。

かういふ氣易きやすさを見て、暮しの方に安心した自分は、例の追ひ求むるところを、歴史の上の不思議、古語の魅力へいよいよ専もつぱらに注ぐのだつた。

養家の父母の甘いをよいことにして、秋成はその青年期を遊蕩ゆうとうに暮した。この点に於て普通の大阪の多少富裕な家の遊び好きのぼんちかたぎに異らなかつた。当時流行の氣質本きよしやを読み、狭斜きやうしやの巷ちまたにさすらひ、すまふ、芝居の見物に身を入れたはもとよりであ

る。そこに俳諧はいかいの余技があり、氣質本二篇を書いては居るが、これは古今を通じて多くの遊蕩児中には、ままある文学癖へきの遺物としてのこつたに過ぎない。ところが、三十五歳、彼の遊蕩生活が終りを告げるころ、彼は突如として雨月物語を書いた。この物語によつて彼の和漢の文学に対する通曉さ加減は、尋常一様の文学青年の造詣ぞうけいではない。押しも押されもせぬ文豪のおもかげがある。遊蕩青年からすぐこの文豪の風格を備そなへた著書を生んだその間の系統の不明なのに、他の国文学者たちは一致して不思議がつて居る。殊ことに彼自身、二十余歳まで眼に国語を知らず、郷党きやうとうに笑はれたなどと韜晦とうかいして人に語つたのが、他人の日記にもしるされてあるので、一層この間の彼の文学的内容生活は、他人の不思議さを増させた。彼はこの時までには俳諧では高井凡圭きけい、儒学は五井蘭州ごいらんしゅう、その他都賀庭鐘つがていしやう、建部綾足たけべあやたり、とい

ふやうな学者で物語本の作者である人々についても、すこしは教へを受けたが、大たいはその造詣を自分で培つた。それも強ひて精励努力したといふわけでは無い。幼年から数奇な運命は彼の本来の性質の真情を求めるところを曲げゆがめ、神秘的な美欲や愛欲や智識欲の追躡といふやうな方面へ、彼の強韌な精神力を追ひ込み、その推進力によつて知らぬ間に、彼の和漢の学に対する蘊蓄は深められてゐた。彼の造詣の深さを証拠立てる事は彼が三十五歳雨月物語を成すすこし前、賀茂真淵直系の国学者で幕府旗本の士である加藤宇万伎に贅を執つたが、この師は彼の一生のうちで、一番敬崇を運び、この師の歿するまで十一年間彼は、この師に親しみを續けて来たほどである。この宇万伎は、彼が入門するとたちまち弟子よりもむしろ友人、あつるひは客員の待遇をもつて、彼に臨み、死ぬときは、彼を尋常

一様の国学者でないとして学問上の後事をさへ彼に托たくした。そして、この間に彼の名もそろそろ世間に聞え始めてゐた。しかし、それほどの師にすら、秋成の現実の対照に向つては、いつも絶対の感情の流露を許さぬ習癖が、うそ寒い疑心をもち〓〓師のいひし事にもしられぬ事どもあつて、と結局は自力に帰り、独窓のもとでこそ却かえつて研究は徹底すると独学孤陋ころうの徳を讚美して居る。

かういふやうに、人に屈せず、人を信ぜぬ彼であつたが、前の養母にも一度衷心感謝ちんくわんを披瀝ひれきしたといふのは、享和元年彼は六十八歳になつたが、この年齢は大阪の歌島稻荷社の神が彼に与へた寿命の尽きる歳であつた。養母は秋成が四つの歳に疱瘡ほうそうを病み、その時死ぬべき筈はずの命を歌島稻荷に祈つて、彼が六十八歳まで生き延びる時を期して自分の命を召します代りに、幼い

命を救はれよと祈つたのであつた。その六十八歳になつても彼は死なず、祈つた養母自身がそれから二年目に死んだのが、自分の身替りのやうに有がたく思はれ、死骸しがいに向つてしみじみ頭を下げたのだつた。それにしてもそれから今日までまた余りに生き延びた。やつぱり自分のしんにうづいてゐるまた何物かを追ひ求める執念が自分の命を死なさないのか。この妄執の念の去らぬうちは、自分はいやでもこの世に生かせられるのではあるまいか、それは、辛つらく怖ろしいことのやうに思はれる。また、楽しい心丈夫な気持もする。人間にある迷ひといふものは、寿命に對してなかなか味のある働きをしてゐるやうにも考へられる。

疑念ふかい彼はまた、若い頃からどの女を見ても醜い種が果肉の奥に隠されてゐて、自分の興さまを醒さめた。男を誘惑して子を

生んでやろう。産んだ子を人質に、男を永く自分の便りにさしてやろう、生んだその子に向つては威張つて自分を扶助さしてやろう——かういふいはれの種を持たない女は一人も無からう。もつとも女自身が必ずしもさういふ魂胆を一人残らず知つてゐて男に働きかけるわけではない。たいがいの女は何にも知らずに無心に立居振舞ふのである。だがその無心の振舞ひのなかに、もう、これだけの種が仕込まれてゐるのだ。女が罪が深いとほ、とけも云はれたが、およそ、こんなところをさしたのではないか。自分が遇つた女にはみなこの罾があつて危くてうつとりできなかつた。また、しやうばい女などはそれとはまるで違ふ種だが、やつぱりかならず持つて居る。男を迷はさず男の魂を飛ばさずに惚れられる女は一人も無かつた。惚れればきつと男の性根を抜き、男を臍抜けにして木偶人形のやうに扱はうとする。

男に自分の性根をしつかり持ち据ゑさせ乍ながら恍惚こうこつたる氣持にさして呉くれる女は一人も無かつた。さういふ女のこことごとくが、男の性根のあるうちは、まるでそれをさかかなに骨があるやうに氣にしてむしりにかかる。骨がきれいにむしられて仕舞しまふと安心して喰べにかかる。

酒のやうに酔はせる女はたくさんある。茶のやうに酔はせる女は一人も無い。榮西ようさいぜんじ禪師の喫茶養生記の一節を思ひ出す。「茶を飲んで一夜眠らぬも、明日身不レ苦」と。一夜眠らざるも明日身苦しからぬ恋があらうか……そんなわけから、二十九のとき貰もらつた妻といふものにも何の期待も持たなかつた。年頃になつたから人並に身を固めるといふ世間並に従つたまでだ。名をお玉といつて自分とは八つ違ひだつた。大阪で育つた女だが、生れは京都の百姓の娘だから辛抱は強かつた。踏みつけければ踏み

つけられたまま伸びて行くといふたちの女だった。それを幸さいわひ、こちらもまだ遊び盛りの歳だものだから、家を外に、俳諧はいかい、戯作げさく者仲間のつきあひにうつつを抜した。たまにうちへかへつてみると、お玉の野暮やぼさ加減が気に触った。自分と同じ病気なものも癩しやくに触った。遊びは三十を過ぎても慢性になつて続いて行くうちに、三十七の歳に養父は歿なくなる。紙屋の店を継いではじめ、て商売を手がけてみた。慣れぬこととてうまくゆく道理はない。その弱り目に翌年逢あつた店の火事、次の一年間は何とか店を立て直さうとさまさまに肝胆を砕いてみたが駄目だめだった。そしておよそ商家に育つて自分くらゐ商売に不向きな性質の人間はなにと悟つた。何故なぜといふに、みすみす原価より高く利徳といふものを加へて品物を、知らん顔して人に売るといふことが、どうも気がひけてならなかつたからである。商品に手数料の利徳

といふものをつけるのは当りまへであるには違ひなからうけれど、性分だ、その利徳はただ儲けもくろの為に人に押し付けるやうで、客に価値を訊きかれても、さそくに大きい声では返事も出来なかつた。こんな風だから三年目には家を潰つぶして田舎落いなかおちした。そしてあるものはたいがい食ひ尽して仕舞しまつたから身過ぎのため何か職業を選ばなければならなくなつた。年も四十に達したので、もうぐづぐづしては居られない、まあ、知識階級の人間には入り易やすさうに考へられた医学で身を立てることに決心した。

当時日本の医学界には、関東では望月三英、関西では吉益東洞よしやすとうどうといふやうな名医が出て、共に古方こほうの復興を唱へ、実技おおいも大にあらたま革り、この両派の秀才とうけいが刀圭つかさどを司る要所々々へ配置されたが、一般にはまだ、行き互わたらない。大阪辺の町医村医は口だけは聞き覚えた東洞が唱道の「万病一毒」といふモットーを喋しゃべ舌べるが、

実技は在来の世間医だった。三年間つぶさに修学した秋成は、安永四年再び大阪へ戻つていよいよ医術開業。そのときにかういふことを決心した。「医者はどうせ中年の俄仕込みだから下手で人がよう用ひまい。だから、足まめにして親切で売ることしよう。しかし、いかに俗に墮ちればとて、世間医のやる幫間ほうかんと骨董こつどうの取次とりつぎと、金や嫁なこうどの仲人口なこうどだけは利くまい」と決心した。足まめにやる方針は一草医秋成を流行はやらせて暮しも豊ゆたかになつた。医者をはじめて四年目に、家を買ひ、造作をし直して入るやうになつた。その時の費用十二貫目かんを払ふことも、さう骨折らずに都合がついた。まづこの分なら見込みはついたと、せつせと働くうちに、自体が弱いからだなのでたうとう堪へ切れず残念にも医者をやめなければならなくなり、またもとの田舎住居いなかずまいとはなつた。其処そこがすなはち長柄川の閑居だった。

妻のお玉にしても、どこに妻らしいたのしみがあつたらうか。自分が遊び盛りの若いうちは運びの留守番、医者になつて流行るうちは客の取次、薬の調合、それからやつと家にゐるやうになると、病人になつた夫の介抱だ。その上七十六まで永生きさせた自分の養母を引受けて面倒は見る。まるでお玉は自分の家へ女中に来たやうな女だつた。自分も六十に手が届くやうになり、田舎いなかの閑居で退屈まぎれに、同棲どうせい三十年近くで、はじめて妻といふ女を見直して見るのであつた。それも、左の眼は悪くなつてしまつてゐたから、右の眼一つであつた。このときお玉はもう五十一歳だつた。もともと取立てるほどのきりやうもなかつたが、それが白髪しらがだらけになると、ただありきたりの老婆ろうばだつた。一体が、さういふふうな女でもあるし、京都生れで、辛抱強いのに生れの性といふ考へが、こつちの頭にあるものだ

から、ただかういふ風に苦勞をするやうにできて来た女が老婆になつても、根よくことごと働いて居る家具のやうで、その点
が、めづらしかつたのだ。この女に、女らしきなどあるとも思
はないし、見つけ出すのはいや味な気がして、妻が枯木のやう
な老婆になつて行くのを、却て珍重する気持だつた。だから自
分が五十九歳、妻が五十一歳の寛政四年にまづ妻の母親が死に、
すぐ自分の養母が死にして、何だか気合ひ抜けしたやうな形に
なつた妻のお玉が、髪をおろして尼の態になり度いと申出たと
きに、早速それを許したのだつた。女臭いところの嫌ひな自分
の傍にゐる女が一層枯木の姿になるのはさつぱりするからだつ
た。そのとき妻は、尼らしい名をつけて呉れと頼むのですこし
思案して『瑚璉』とつけてやつた。どういふわけだと妻が訊く
から、これこれと呼ぶのに便利がいいからだと言つた。半分は教へ

てやると、あんまり手軽すぎると不満さうだつたが、強しひてこ
とわりもせず、やがてその名のつもりになつてゐた。

尼の形になつてからのお玉が驚かれたのは、まるで気性の變
つて仕舞しまつたことであつた。ぱつぱつと話はする。氣の向くと
き働くが、氣の向かぬときはどこまでも不精ぶしようをする。世間態ていな
どちつとも構かまはなくなつて、つづれをぶら下げた着物でも平氣
で外へ出る。そしてむやみに笑ふやうになつた。多病でよく寝
込むが、それを見舞ふとあはあは笑ふ。かうなつて来ると、却かえつ
て自分には彼女にいつくしみが出て来るのだ。いんぎんにまめ
に自分の面倒を見た若いときの妻の親切といふものは、一つも
心こころに留とどつて居ないのに、綻ほころびて仕舞つたやうになつた彼女が、
ただわけもなくときどき自分の眼を見入るその眼を見ると、結
婚して以来はじめて了解仕合つたといふ感じがするのであつた。

しかも彼女は、一向もうそんなことをうれしいとも思はない無意識の状態で、自分を眺めるのだつた。

最初から、すこし、いける口の彼女であつたが、それからは遠慮もなく、金があれば酒を飲み出し、京都へ移つてからは、画描きの月溪など男の酒飲み友達と組になり、豆腐ぐらゐの肴さかなでわびた酒盛をしじゆうやつた。

この女も尼になつてから七年目、自分が六十六歳、彼女が五十八歳のとき死んだ。

彼女に就いては死んだ後、まだ一つ意外な思ひをさせられた。

彼女は自分の道楽を見習つて、すこしは歌めくもの、まれに短文などつづりもしたが、元来家事向きに出来て居る女の物真似、なに程の事ぞときめて、取り上げた事もなかつた。彼女も臆おくして自分には見せなかつた。ところが彼女が死に、彼女のす

こしばかりの遺のこしもの破れた被布ひふ、をさながたみの菊きくだ、たうなど取片づけてゐるうちに、ふと、糸でからめた文反古ふみほうこの一束を見つけ出した。読んで見ると、自分の放埒時代ほうちうつにしじゅう留守をさせられた彼女の、若き妻としての外出中の夫に対する心遣ひを、こまごまと打開けたものや、子の無い自分が長柄川閑居時代に、ふと愛した近隣のこどもに死なれ愁歎しゆうたんの世にも憐れあわなありさまを述べたものなどであつた。書きぶりも自分のによく似た上、運ぶこころも自分へ向けてゐるものばかりであつた。あの虫のやうな女に、こんな纏綿てんめんたる気持が蟠わだかまつてゐたのか。自分のやうな枯木ともなま木ともわけの判らぬ男性にやつぱり情を運ぼうとしてゐたのか。さう思ふといぢらしくなつて、その文反古の上に、不覚の涙さへこぼした。しかし、再三読返してゐるうちに、自分に対して姉ぶつた物言ひや、自分を恨うらまず、

なんでも世の中の無常にかこつけて悟りすまさうとする貞女振りや、賢女振りが、目について来て、やつぱり彼女も世間並の女であつたかと、興が醒めたとは云ひながら、その意味からいつて、また憐れさが増し、兎も角も人が編んで呉れた自分の文集『藤篋冊子』の末に入れてやつた。

秋成は、かういふ流浪漂泊の生活の中に研鑽執筆してその著書は、等身の高さほどあるといはれてゐる。国文に關した研究もの、国史、支那稗史から材料を採つた短篇小説、校釈、對論文、戯作、和歌、紀行文、隨筆等、生涯の執筆は実に多岐に涉つてゐる。その著書は、煎茶道の祖述、漢印の考証にまで及んでゐる。しかし、これ等の仕事は、気ままできれぎれで、物質生活を恵む筈なく、学才は人に脅威を与へ乍ら、生活はだんだん孤貧に陥つて行つた。

養母と姑しゅうとめが死んだ翌年の寛政五年、剃髪ていはつした妻瑚璉を携へて

京都へ上つたときは、養母の残りものなど売り払つて、金百七

両持つてゐたといふがそれもまたたく間に無くなり、それから

書店の頼むわず僅かばかりの古書の抜釈はつしやくものかなにかをして、十両

十五両の礼を取つて暮してゐたが、ずっと晩年は数奇すき者が依頼

する秋成自著の中でも有名な雨月などの謄写とうしやをしてその報酬で

乏とほしく暮して居た。しかし、それも眼がだんだん悪くなつて出

来なくなり、彼自身も『胆大小心録』で率直そつちよくに述べてゐる通り、

「麦くたり、やき米の湯のんだりして、をかしからぬ命を生きる

——」状態になつた。

妻の瑚璉尼が死んで、全く孤独のやもめの老人となつた秋成

は、一時、弟子の羽倉信美はぐらのぶよしの家へ寄食してみたが窮屈で堪へら

れず、またよろほひ出て不自由な独居生活に返つた。

故郷なつかしく大阪に遊んだり静かな日下の正法寺へ籠つて眼を休ませてみたりしたが老境の慰めるすべもなかつた。年も丁度七十歳に達したので、前年棲んで知り合ひの西福寺の和尚に頼んで生き葬らひを出して貰ひ、墓も用意してしまつた。

秋成はそのときのことを顧みて苦笑した。さすがの癩癖おやぢも我を折つたかと意外に人が集つて来た。恥をかかせてやつたので怒つて居るといふ噂の若い儒者まで機嫌よく挨拶に来た。役に立たないやうなものをたくさん人が呉れた。それ等の人々は自分をいたはつたり、力をつけたりする言葉を述べた。そして自分がしほらしく好意を悦び容れる様子を示すのを期待した。自分はしまつたと思つた。

自分で自分を葬る気持は、生涯何度も繰返したので、一向めづらしいことではない。今度こそ、すこし、それを大がかりに

形式に現して氣持を新あらたにするつもりでゐたものを、これではまるで、他人に自分を葬らせる機会を作つてやつたやうなもので、今更、取返しのかね失敗のやうに思はれた。で、ふしよう、ぶしよう||有難う、まあ、これからこどもに返つた氣で……といふと、その言葉に飛びついて||それが宜よい、全くこれからは、何もかも忘れてこどもに生れ返りなさることですぞ。と自分と同年でありながら、髪が黒く、齒が落ちず、杖つえいららず、眼自慢の老人が命令的に云つた。日頃病身の癖に、壮健な彼と同じやうに長命する秋成を腹でいまいますがつてゐる老人だつた。彼は彼に向つて日頃いたづらなる健康を罵ののる秋成に、折もあらば一撃を与へようと機会を覗うかがつてゐたのだつた。彼の言葉は||この上、長生きをするなら、もちつと、おとなしくしろ。といふのも同じだつた。まはりで聞いて居た人々は手を拍うつて、

さうだ、そのことそのこと、といった。

それから、知友の連中は牒しめし合したやうに、自分をこども扱ひにし、真面目まじめに相手にならなかつた。彼はその方が都合がよかつた。相手はこどもに返つた老人だといふ考への下に、愉快に自分の罵言ののちげんも聴き、寛容も秋成に示せた。もう誰も、秋成に向つて真理に刺されて飛上る苦痛の表情も反抗する激怒の態度も見せて呉くれるものは無くなつた。垂れ幕のやうな、にやにやした笑ひだけが、自分の周囲を取巻いた。秋成は、的が無くなつて、空むなしい矢を射る自分の疲労に堪へられなくなつた。

彼等はその上、自分に深切さへ見せ出して自分の文集を編み出した。誰にも、手をつけさせなかつた草稿を入れて置く机のわきの藤簍つづらかごを搔廻かきまわしたり、人のところから勝手に詠草えいそうを取り寄せたりして版に彫つた。家鴨あひるは醜くとも卵だけは食へると

思つたのかも知れない。自分が何か註文をいひ出すと〓〓ことにも返つたのを忘れては困る。遊んで遊んで。と肘ではねた。これらの草稿は、やつぱり、自分のかねての決心どほり、自分の柩ひつぎと一しよに寺に納めて後世を待つべきものではなかつたかしらん。人に挽もぎとられて育つたやうな冊子でも出来て見れば、可愛かわゆくないことはない。それだけにまた、人に勝手にされたいまましい気持も、添そふが。

夜も更け沈んだらしい。だみ声で耳の根に叩たたきつけるやうな南禅寺の鐘、すこし離れて追ひ迫る智恩院の鐘、遠くに並んできれいに澄きよむ清水きよみず、長楽寺の鐘。寒さはいつの間にかすこしゆるんで、のろい檐ひさしの点滴の音が、をちこちで鳴き出した梟ふくろうの声の鳴き尻たを叩たたいてゐる。雨ではない。靄もやだ。それが戸の隙間すきまから見えぬやうに忍び込んで行燈あんどんの紙をしめらしてゐる。湯罐たづなの

水はすつかりなくなつて、ついでに火鉢の火の氣も淡くなつてゐる。

秋成は、尽きぬ思ひ出にすつかり焦立いらだたさせられ、納りおさまかねる氣持に引かへ、夜半過ぎて長閑のどかな淀みよどみさへ示して来たあたりおきなの闇の静けさに、舌打ちした。|| || なが、この俺がこどもに歸つた翁か。求めるころも愛憎も、人に負けまい、勝負のころも、みんな生殺なまじろしのままに残されてゐるではないか。身体が、周囲が、もう、それをさせなくなつてしまつたまでだ。もしそれをさせるなら俺は右の手にも左にもちび筆を引握つて、この物恋ふころ、説き伏せ度たい願ひを吐きに吐きつつ、しかも、未来永劫癒えいごういやされぬ人の姿のまま、生き延びるつもりだ。それを、さうはさせない身体よ、周囲よ、汝等なんぢらはみな人殺しだぞ。人殺し！ 人殺し！。と秋成は、自分の身体に向け、あた

りに向け、低いけれども太くて強い調子の声を吐きかけた。そして、今更、自分の老おいを憎んだ。

かうなつたら、やぶれ、かぶれ、生きられるだけ生きてやろう。身体が足の先きから死に、手の先きから死にして行かうとも、最後に残つた肋骨ろっこつ一本へでも、生きた気込みは残して見せようぞ——。考へがここまで来ると彼は不思議な落着きが出て来た。

曉方あけがた近くらしいぬくい朝ぼらけを告ぐるやうな鶏とりの聲が、距離不明の辺から聞えて来た。彼はこの混濁した朝、茶を呑のむことにとぼけたやうな興味を感じ出した。彼はまた湯罐かまどに新しく水を入れて来て火鉢の火を盛んにした。湯の沸く間に、彼は彼の唯一の愛玩品あいがんの南蛮製なんぼんの茶瓶ちやびんを膝ひざに取上げて畸形きけいの両手で花にでも触れるやうに、そつと撫なでた。五官ごうの老耄ろうもうした中で、感

覚が一番確かだった。

南禅寺の本部で経行が始つた。その声を聞きながら、彼は死んだ人の名を頭の中で並べた。年代順に繰つて行つて五年前、享和元年に友だちの小沢蘆庵が七十九歳で死に、仕事敵の本居宣長が七十三で死んでゐるところまで来ると彼は微笑してつぶやいた——生氣地なし奴等だ。

十二歳年下で、六十歳の太田南畝がまだ嬰鑠としてゐるのが氣になつた。この男には、とても生き越せさうにも思へなかつた。世の中を狂歌にかくれて、自恣して居るこの惻恰な幕府の小官吏は、秋成に対しては、真面目な思ひやり深い眼でときどき見た。それで彼も、生き負けるにしろさう口惜しい念は起きなかつた。

茶瓶に湯が注がれて、名茶『一の森』の上臈の媚びのやうな

淡いいろ気のある香気が立ちのぼった。彼は茶瓶をむづと掴んだ。茶瓶の口へ彼の尖とがつた内曲りの鼻を突込んだ。茶の産地の信樂しがらきの里の春のあけぼのの景色も彼の眼底に浮んだ。

その翌、文化四年七十四歳の秋成は草稿五束を古井戸に捨てた。

さうかと思ふと、その翌、文化五年には、人が、彼の書簡集『文反古』を編んで刊行するのを許して居る。そして、彼自身も、最も露骨な告白文である随筆集『胆大小心録』を完成して居る。

翌、文化六年六月、彼は、弟子の羽倉信美の家で死んだ。住み切らうと決心した南禅寺の小庵『鶉居うずらい』にも住み切れなかつた。信美の家へ引取られるまでに、一時、寿蔵じゅぞうを営んだ西福寺

へ寄寓したりなぞしても居た。

底本：「日本幻想文学集成 10 岡本かの子」国書刊行会
1992（平成 4）年 1 月 23 日初版第 1 刷発行

底本の親本：「岡本かの子選集」萬里閣
1947（昭和 22）年発行

初出：「文学界」
1935（昭和 10）年 8 月

※ルビを新仮名遣いとする扱いは、底本通りにしました。

入力：門田裕志

校正：湯地光弘

2005 年 2 月 22 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。